

アレクサンドリアのフィロン『観想的な生活』におけるテラペウタイの諸相

入植地の地理的位置、共同体の社会的背景および組織構造を中心に(1)

木村和良

はじめに

本稿では、ユダヤ人哲学者・聖書学者フィロン(2)(前二五年頃―後五〇年頃)著『観想的な生活』において描かれた、テラペウタイと称される、ユダヤ教徒の禁欲主義的共同体について、彼らの入植地の地理的位置、共同体の社会的背景、ならびに共同体内部の組織構造、以上三つの観点から検討してみたい。『観想的な生活』という著作全体は、テラペウタイに関する報告という形式をとっている。テラペウタイに関する古代の証言は、この『観想的な生活』以外には、フィロンの著作も含めて、他の文献資料には全く存在していない(3)。フィロン自身、この共同体に参加したことがあるのかどうか、そしてこの著作が彼自身の経験にもとづく報告かどうかは、この著作内容から判断する限り、明らかではなく、また、本書の執筆年代についても、はっきりしていない(4)。

一 テラペウタイ入植地の地理的位置

一・一 テラペウタイによる入植地の選択

フィロンは『観想的な生活』において、テラペウタイの入植地の立地条件について次のように述べており、その場所をきわめて正確に位置づけている。

各地域の集団の中でも、最も優れた者たちは、あたかも「テラペウタイの」祖国へ遣わされるかのように、（アレクサンドリア近くの）ある入植地へ派遣される。それは、マレイア湖の上手の小高い（低い）丘の上にあり、安全性と心地好い（穏やかな）空気の故に、極めて快適な場所で、（彼らの共同生活に）ぴったりの土地である。

安全性は、周囲の農家と村落が、空気の心地好さ（穏やかさ）は、海へ向かって開いている湖と近くの海洋から絶え間なく吹き寄せる微風が、提供しているのである。海洋からの風はきめ細かく、湖からの風は濃厚で、両者が混ざり合ってきわめて健康的な気候（空気）が生ずるのである。『観想的な生活』22-23（5）

フィロンはこのように、テラペウタイの入植地を的確に定めつつ記述していることから、彼はテラペウタイが共同体生活を営んでいた場所を正確に把握した上で、本書を執筆した可能性が高いと思われる。Winstonが指摘するように、「フィロンはテラペウタイを、彼自身が住んでいたアレクサンドリアからさほど離れていない場所に位置づけていることから、彼がテラペウタイを創作したということはありえないことは明らかである。理想郷とは、たいてい遠く離れた場所に位置づけられるものであり、実証へのいかなる努力からも免れるからである」⁽⁶⁾。フィロンは、開けた海に近いマレイア湖の上手に位置する小高い丘について言及している。さらに彼は、テラペウタイが「泉の水」⁽⁷⁾（『観想的な生活』37）を飲んでいることにも言及しているが、このことは、

天然の泉がさほど離れていない場所にあることを示唆しているものと考えられる。

フィロンはテラペウタイが、「あたかも『テラペウタイの』祖国へ遣わされるかのように」(『観想的生活』21)まさにこの場所へやって来ると述べている。こうした記述は、完璧な場所を志向するテラペウタイの生来的な傾向を強調しているように思われる。テラペウタイは「自分たちと品性の異なる者たちとの交際は、無益であるばかりか、有害ですらあることを、見抜いている」(20節)とあるように、感性を異にする人々の住む町の騒々しさとは対照的に定義されている。彼らは自分の財産を友人や家族に譲渡した上で、別の町ではなく、まさにこの共同生活にはうってつけの場所へと「逃れてくる」(18節)。テラペウタイは、彼らが共同生活を営むための場所を適切に選んだのであり、入植地を決定するにあたって、まさに的確な判断を下した、という印象が得られる。さらに、ここは海と湖の両方から十分に風が吹き寄せる場所で、健康的な環境に恵まれており、しかもそこは安全性の保証されている土地でもある(7)。人々が故国へと向かうように、観想を志向するテラペウタイは、共同体生活に最適の場所へと向かうのである。

一・二 テラペウタイの居住地

先に指摘したように、もしフィロンがあるグループを創作するとすれば、人々が確かめることのできないような、はるか遠い場所にそのグループを位置づけるのが自然であると思われる。ところがフィロンは『観想的生活』において、テラペウタイを、アレクサンドリアというローマ統治下の大都市の近郊に、それも的確な地理的記述でもって位置づけている点は注目に値する。もしフィロンが実在しないグループについて述べようとしているのであれば、テラペウタイがとりわけ「小高い丘の上に」(ἐν τῷ ὄρει ὑψηλῶν ὄρεων)住んでいるというように、具体的にかつ明瞭な視覚的イメージを与えるような表現で、詳細に記述する必要性はなかったのではないかと思われる。Taylor-Daviesによると、「小高い丘の上に」という語句は、アレクサンドリアの南西側、北東から南西へと延びる、低い石灰岩の隆起からなる丘の上にある場所を指している(8)。この隆起は高さ最大約三十メートルで、アレクサンドリア郊外にあるこの石灰岩の隆起は、古代において「細長い土地」(ὁ Τανία)として知られて

いた(9)。

テラペウタイの入植地が、この「細長い土地」の上に位置していたとするおおよその位置づけは、Daumasによってなされている。彼はこの地域に「大きな村落と、植生があまり砂漠性でない時期には何本かの細い静かな水流を遮ることもあった小さな谷」の存在を確認している(10)。ストラボンには、マレイア湖周辺の人口密度が高かったことを強調している。そこには八つの島があり、「湖の周りのすべての岸には人が多く住んでいた」(『地理誌』一七・一・一四)ことから、マレイア湖畔が人気のない荒野のような土地ではなかったことが推測される。この地域はワインの産地として知られており(11)、さらにパピルスとエジプト豆が湖の側に生い茂り(12)、パピルス植物は湿地湖岸で豊富に生えていた。パピルスはアレクサンドリアの特産品の一つであった。フィロンによれば、テラペウタイはその饗宴において、地元の土地に生えるパピルスでできた敷物を、質素な素材で作られた寝いすに敷いて使用していた(『観想的生活』69)。

マレイア湖は運河によってナイル川に接続していた。ストラボンによると、湖上での往来は海からの往来よりもさらに多く、結果としてアレクサンドリアのマレイア湖側の港の方がより豊かでもあった(『地理誌』一七・一・一七)。フィロンは、テラペウタイの入植地が荒野に位置していたのではなく、近隣に村々やその他の住居が存在することで、この場所が孤立とは無縁であり、安全性の必要が満たされていることを強調している。そしてDaumasが指摘するように、「タボシリス・マグナまでの海岸全体には、古代の遺跡が数多く存在している」(13)。裕福なアレクサンドリアの人々はこの地域に保養地の別荘を建てたが(14)、その地域の主な性格は、多くの小さな村のある農業的なものだった。

フィロンは、テラペウタイが住んでいた場所は「周囲の農家と村落」のおかげで安全性が与えられていたと記している(『観想的生活』23)。ここでの「村落」にあたるギリシア語は $\kappa\alpha\iota\upsilon\eta$ で、この語は基本的に「壁で囲まれていない村」を意味する(15)。一方、「農家」にあたるギリシア語は $\epsilon\pi\alpha\gamma\alpha\gamma\epsilon$ で、基本的には「農場」を意味し、「農場の建物」や「田舎の住居」を意味する場合もあった(16)。したがって、フィロンによるテラペウタイの立地条件に関する記述は、その入植地が孤立した場所にあるというよりもむしろ、その周囲に人々が住んでいるという印象を与える。テラペウタイの入植地は、人の住む場所から遠く離れた荒

野に位置するような土地ではなく、町からは離れているものの、完全に孤立しているというわけではない土地にあったものと思われる。するとその周辺地域の住民は、おそらくこの共同体の存在を知っていた可能性も考えられる。そこは肥沃で恵まれた農業地であり、農園地帯でもあった。テラペウタイも同様に、安息日に解放されるべき家畜を所有していた可能性が示唆されている(36節)。

Conybeare は、テラペウタイの入植地を特定できる可能性は低いと考えていたが(17)、フィロンがその敷地の周囲の住居と村々に言及していることから、そうした村々と住居を維持するのに十分な、耕作に適した土地が付近に存在したものと考えられる。マレイア湖と地中海は、北東ではなく南西で隣接していた。この南西方面の石灰岩の隆起の上や周りに、古代のブドウ絞り器や井戸、別荘、農園や村々が見られ、これらは約六十キロメートルの海岸線に沿って点在している(18)。したがって、テラペウタイの入植地の位置づけに関して、アレクサンドリアの南西に延びる、この石灰岩の隆起に沿った場所以外に可能性の考えられる土地は、他に存在しないものと思われる。

一・三 孤独の追求

フィロンは、テラペウタイに代表される、観想的な生活を奉ずる人々を位置づける際、こうした人々はエジプトのノモスと呼ばれる各地区において見られるだけでなく、とりわけアレクサンドリア付近に多く見られると述べている(『観想的な生活』21)。テラペウタイが観想に専念する生活を送るには、静かな環境が必要であったものと思われる。彼らは、静寂の内に観想的な生活を送るために、アレクサンドリアという町から距離を置いていた。フィロンは、町に対するテラペウタイの考え方を次のように述べている。

と言って、彼らは他の町に移住するようなことはしない。他の町に移住することは、あたかも、現在の所有者から他人に売り渡されることを求める不幸なあるいは悪しき奴隷が、それによって「自由」をではなく「別の主人」を手に入れるに過ぎない。

いのと、同じことである。実際、町（ポリス）というものはすべて、たとえ法秩序が極めてよく守られている町ですら、口にするべからざる程に騒々しく混乱に満ちており、ひとたび知恵に導かれて歩みだした者は、これに耐えることができないであろう。むしろ彼らは、「町の」城壁の外に出て、孤独を求め、庭園や人里離れた場所で時を過ごすのである。それは、決して、人間嫌いという粗野な慣習に基づくものではなく、自分たちと品性の異なる者たちとの交際は、無益であるばかりか、有害ですらあることを、見抜いているためである。『観想的生活』19-20)

この記述から判断すると、テラペウタイは「別の町に」(εἰς ἑτέραν πόλιν) 移り住むのではなく、むしろ町の中の生活の混乱と喧騒を避けるために、町を離れるということになる。したがって彼らは、田舎出身の人々でないことは明らかであると思われる。彼らは別の町に移り住まずに、町以外の土地に移り住む決心をした、もともとは町の住民であった。このことから、彼らの起源は本来、町の中にあつたものと考えられる。

フィロンはここで、テラペウタイが町の外へ出て生活を送る場所は「庭園」あるいは「人里離れた土地」であり、そこで彼らは「孤独を求め」(ἐρητίαν ἡρεσδιώκοτες) る目的で時を過ごす⁽¹⁹⁾と述べている。ここで「庭園」と訳されたギリシア語は κήπος で、他に「果樹園」「農園」を意味し、さらに「肥沃でよく耕された土地」を意味する場合もあった⁽¹⁹⁾。一方、「人里離れた土地」にあたるギリシア語は ἡμεροπλῆα であり、『アブラハム』22-23では、「善人 (ἀρετός) は静寂な生活を熱望して、世間から離れて孤独を愛する」が、それは人間嫌いによるものではなく、「町を離れて、人間という種族の中で最も優れた者たちとの交わりをより楽しみつゝ、人里離れた土地で (ἐν ἡμεροπλῆα) 時を過ごす」のである、として用いられている⁽²⁰⁾。テラペウタイも同様に、あまりに騒々しく騒乱に満ちた町の中では、静寂の内に観想を追求することは不可能であった。「孤独」を意味するギリシア語 ἐρημία には、「砂漠」「荒野」という意味もあるが、ここでは明らかに、文字通り「人気がない砂漠の荒野」という意味ではなく、「町の人々の喧騒から隔絶した孤独」という意味で用いられていると思われる⁽²¹⁾。マレイア湖は往来が多く、この地域には町や村をはじめとして、住居や農園が点在していたことから、労働者たちはパピルスとブドウ酒の生産やその他の農

業活動に従事していたものと考えられる。

テラペウタイは、泉に近い、安全性の保証された、湖と海から微風の吹き寄せる、たいへんに恵まれた快適な場所に居を構えていた。そこはまた安全性という点で周囲の村落からもさほど離れておらず、アレクサンドリア近郊に位置しており、交通の便としては陸路經由とマレイア湖經由の二通りがあったことを考えると、行き易さの点でもさほど不便はなかったと思われる。したがって、テラペウタイの入植地は、居住環境という点ではまさに不動産の一等地であると言えよう。

二 テラペウタイの社会的背景

二・一 テラペウタイのメンバーの教養

ここでは、テラペウタイの社会的背景について検討してみたい。『観想的生活』には、テラペウタイのメンバーが、教養あるエリート階級の出身者たちから構成されていた可能性を示唆する記述が、いくつか見られる。

まず第一に、テラペウタイのメンバーが読み書きの能力を備えていた点が注目される。アレクサンドリアの少年たちは、基礎的なヘレニズム的教育を受けるために、パレストラ(22) (道場) やギムナシオン(体育場)に通うことが求められた。そしてユダヤ人も同じく、これらのパレストラやギムナシオンに参加していたものと思われる。同時にユダヤ人の少年たちは、シナゴークに関連した学校で教育を受けていた可能性も考えられる。

第二に、テラペウタイのメンバーは、男性だけでなく、女性も同様に読み書きの能力を備えていたが、このことは、彼女たちが読み書きの能力を身につけることのできる、裕福な家庭の出身であることを示唆する証拠であるように思われる。Kraemerは、テラペウタイのメンバーについて、「すでにユダヤ教聖書(彼らはこれをフィロンのようにギリシア語で読んでおり、ことによるとヘブル語を知らなかったことすら考えられる)の寓意的解釈に対して好意的な傾向を示していたこと、そしてフィロン自身が備えていたに違いない教養と似たような、古典ギリシア的教育を彼らが受けていたことは、明らかであるように思われ

る」と指摘する⁽²³⁾。テラペウタイの女性メンバーも、男性メンバーに劣らぬ熱意を持って知恵と観想を追求しているという、フィロンによる報告を考慮すると『観想的な生活』32、68）、彼女たちも男性メンバーと同じように、高度な教育を受けていたものと考えられる。Kraemerはさらに、「ユダヤ人にせよ非ユダヤ人にせよ、きわめて多くの女性がこのように高度な教育を受けていたとは考えにくいものの、パピルスや碑文、そして文献などの証拠から、この時代には、少なくとも、アレクサンドリアや、その他相当数のユダヤ人人口を抱える共同体において、一部の女性が高度な教育を受けていたということが示唆されている」と指摘している⁽²⁴⁾。

さらにテラペウタイは、「さまざまな韻律や旋律をとおして神に捧げる賛歌や詩篇を作り、それらに、その内容にふさわしい敵かなリズムをつけ」ていた『観想的な生活』29）が、このことは、おそらくここにやってきた人々が、古典的な教養にも通じていた可能性を示している。この場合もまた、この共同体では女性も音楽を作曲するが、このことは彼女たちの教養が高かったことを示しているものと考えられる。

二・二 財産放棄

フィロンは、テラペウタイがあらかじめ財産を家族や友人に譲渡して、観想的な生活へと入っていくことを述べている。このことはすなわち、彼らはもともと、家族や友人に残すための財産をそれなりに所有していた、ということを含意している。さらにフィロンは、アナクサゴラスとデモクリトスについてやや批判的に述べている。彼らは哲学に夢中になるあまり、自分の土地を家畜の食い荒らすにまかせたのであるが（14・15節）、フィロンは、そうするよりはむしろ、自分の同族や仲間の中で貧しい者たちが、「豊かな資産によって」（16節）益するよう計らうことの方を勧めている。

テラペウタイの経済面に關して、Kraemerは次のように指摘している。「キリスト教徒とユダヤ教徒双方の女性にとって、そして実際男性にとって、祈りと研究の観想的な生活は、十分な経済的支援——それが観想的な人々自身が共同体に寄贈したものであれ、あるいは他の人々が寄付したものであれ——があつて初めて可能であつた。エッセネ派や、後の多くのキリスト教禁欲

主義者集団のような共同体は、肉体労働によって自分たちを支え、それなりの経済的な自給自足を達成することができたが、テラペウタイのような社会は、住居や書物、衣服や食物を供給するために、これらがつましいものであったかもしれないにしても、寄付やあるいは後援者たちに明らかに依存していた⁽²⁵⁾。一般的に禁欲主義者たちは、とりわけ観想に専念する生活様式を営む禁欲主義者たちは、世間との交わりを断って静寂を追求するという隠遁生活の目標と、日々生きていかなければならないという衣食住の面での経済的な現実とを、いかにして両立させるかが問題であったと思われる。テラペウタイの場合は、彼らの観想的な活動を支える人々が、共同体の外に存在したことが推測される。共同体の家屋や土地を維持するためには、その生活全体を観想に充てることのなかった人々、ことによるとテラペウタイの財産を譲り受けた友達や家族からか、あるいは、より広範囲にわたる周辺社会からの、何らかの財政的な援助があったと考えねばならない。

さらにテラペウタイは、自分の財産を、共同体の必要のために共同資金に預けたとは述べられていない点が注目される。彼らは共同体に入会するに先立って、あらかじめ財産を友人や家族に譲渡している。つまり彼らは、共同体の共有資金を創設するために、それらを共同出資したわけではなかった。テラペウタイとは対照的に、エッセネ派のメンバーは、さまざまな仕事によって報酬を得ると、「一人の会計係に与え」、共同会計によって資金を管理していた(『ヒュボテイカ』一一10)。さらにヨセフスによれば、エッセネ派に入会する者は「組織に財産を移管するという決まりがあって、一人一人の財産はまるで兄弟の間におけるごとくに一つにまとめられて全員のものとされる」(『ユダヤ戦記』一二2)。したがって、共同の金庫から共同体の運営資金をまかなっていたエッセネ派とは違って、テラペウタイは共同資金を持たなかったことを考えると、観想的な生活に専念するテラペウタイの他に、財政面で彼らの生活を支える後援者が存在したと想定するのが自然である。

フィロンはこの共同体のメンバーが、「生まれのよい、哲学の修練に励む者たち」(『観想的な生活』69)であると述べている。さらにフィロンは、彼らが「まだ若いうちから哲学の観想的な部分——それこそが最も美しく、神的なものである——を追い求めつつ、成長(成人)し」(67節)たことに言及している。こうした記述を考慮すると、テラペウタイは、フィロン自身がそうであったように、富裕で高度な教養を持つ階層出身の人々から構成されていた可能性が高い。テラペウタイは富を放棄したという

点では貧しいが、彼らは地方出身の人間でもなければ、貧困層出身の人間でもない。この共同体の幅広い社会経済的背景という観点から検討すると、フィロンが実際には、教養あるアレクサンドリアのユダヤ人エリートを、『観想的生活』において提示していると考えることができよう。彼らは静寂の内に、読書や音楽、旧約聖書研究に専念する生活に入るために、都会での裕福な生活様式を放棄することを決意して、マレイア湖畔のテラペウタイの入植地へやってきたものと考えられる。

三 テラペウタイの組織構造

三・一 テラペウタイにおける年功序列制度

ここではテラペウタイの内部組織に注目してみたい。フィロンは、テラペウタイが催す饗宴において、食卓が部屋に運び込まれることに言及している（『観想的生活』73、81）⁽²⁶⁾。ここでの「食卓」は、ギリシア語では単数形で用いられている点が注目される⁽²⁷⁾。この食卓の上には、彼らの特別な食事のための食べ物、すなわちパンとヒソプを混ぜた塩が置かれている。ここでの「一台の食卓」というフィロンによる記述は、テラペウタイが多数のメンバーから構成されていたのではなく、むしろ少人数のメンバーで成り立っていたことを示唆しているように思われる。

テラペウタイの饗宴におけるメンバーの配置に関しては、階層序列制度の存在が認められる。すなわち、テラペウタイに長く所属する古参メンバーが横臥する人々であり、それに対して、テラペウタイに入会して日の浅い新参メンバーが、古参メンバーに奉仕する役割を与えられている。古参メンバーは入会の古い順に（『観想的生活』67、75）きわめて質素な寝いすに横になり（69節）、そして中央の食卓から食事を彼らに運んでくる新参メンバーによって、かき回されることになっている。饗宴におけるこうしたフィロンの描写は、テラペウタイ内での年功序列制度を反映しているものと思われる。

ここで、フィロンが新参メンバーにはあまり関心を示していない点は興味深い。フィロンのテラペウタイに関する描写で、下働き仕事のような活動的あるいは実践的要素を含む事柄は、きわめて簡潔な記述で済まされてしまっている。フィロンは、観想

的な事柄に関連する活動を別にすれば、それ以外の日常の活動については本書ではほとんど何も触れていないが、現実的には、必ず誰かが食事の準備や掃除をする必要があったと考えるのが自然であろう。したがって、そうした日々生活する上での実際の準備作業は、ほぼすべてテラペウタイの新参メンバーたちの手に委ねられていたものと考えられる。実際のところは、彼らには、古参メンバーとは違って、観想に専心する生活様式を享受する権利が与えられていなかったのではないかと、とすら推測される。フィロンによれば、テラペウタイの古参メンバーにも、あるいは食卓において食事の世話をする者の中にも、奴隷は一人も存在しない。つまりテラペウタイのメンバー全員が自由人であり『観想的生活』71、72、給仕の仕事に関しては新参メンバーたちが奴隷の役割をこなしている。この新参メンバー、すなわち、「当番の者」(ἐμπροσθεν)あるいは「給仕役の者」(δακτύλος)(28)は、古参メンバーたちを自分たちの共通の両親としてみなしていることから、実の子供たちのように競い合い喜んで彼らに仕えている(72節)。

ここで注目すべきなのは、新参メンバーすなわち入会歴の浅いテラペウタイが、彼ら自身たいへん年をとっている場合もあるが、古参メンバーすなわち入会歴の長いテラペウタイの方が、新参メンバーよりも年齢的に若いという場合もあったであろう、ということである。というのも、年齢的には年上の人々であっても、もしその人々がつい最近になってテラペウタイに入会したのであるとすれば、彼らは入会歴の長い古参メンバーたちの「子供」とみなされることになるからである(『観想的生活』67)。新参メンバーたちは、古参メンバーたちが何ものにも妨げられることなく観想的な生活に専念できるよう、日々の生活の身の回りの世話を含めて、支援環境を提供する役目を果たしている。

『観想的生活』ではほとんど触れられていないものの、共同体の実際の運営に関する現実面を考えるならば、新参メンバーたちはきわめて多忙であったであろうことが推測される。たとえば、夕食は毎晩準備され、それぞれ離れた質素な住居で生活するテラペウタイのところへ運ばれたものと考えられる。テラペウタイはふつう日没後に食べ物と飲み物に気を配ることになっている(『観想的生活』34)。フィロンは、テラペウタイの中には、観想に専念するあまり、三日間あるいは六日間食物のことを考えないで過ごす者もいると述べているが(35節)、断食を目的として観想に専念するわけではないので、食事は基本的に毎日用意され

ていたと考えるのが自然であろう。フィロンの描写では、食事を運ぶメンバーについてはまったく触れられていないため、あたかも食事がテラペウタイの独立した各住居に、誰の手によることもなく出現しているような印象を受ける。それぞれの聖室ないし隠者の庵で観想に専念するテラペウタイたちは、六日の間「庵の玄関をまたぐことも、遠くからそれを見ることもしない」(30節)のであるが、それにもかかわらず彼らは基本的に毎日食事をとっているものであり、あるいは食事に手をつけなくとも、少なくとも食事をとるという選択をすることは可能であったはずである。

フィロンは、これらの新参メンバーたちは「自由人なら誰でもよい、というわけではなく、共同体の中から、きわめて注意深く、その長所(美点)の故に選び抜かれた若者たちであり、「彼らの仕事ぶりは」最高の徳を目指して倦むことのない善人(有徳の士)や生まれのよい者たちのそのようなものでなければならぬ」(『観想的生活』72)と述べており、69節に続いて、再びテラペウタイの生まれのよさへの言及がなされている点にも注目したい。この言及は、テラペウタイに入会するにあたっては、何らかの基準ないし手続きが存在した可能性を示唆していると考えられる。つまり、この共同体は、思い立って入会したいと希望する人なら誰にでも門戸が開かれていたというわけではなかったことが推測される。しかしながらこの入会手続きについては、本書では何一つ語られていない。

テラペウタイの饗宴での進行に関してフィロンは、「当番の者——これらの役を(交代で)勤める者たちをこう呼んでいる——の一人が合図をする」(『観想的生活』66)と述べており、このことから、新参メンバーが饗宴全体の進行役を努めていたことは明らかである。また横臥するのは古参メンバーたちのみであり、新参メンバーたちはもっぱら下働き仕事に取り組んでいたことも明らかである。この饗宴では、まず古参メンバーが「入会(の古い)順に、横臥する」(67節)。一方、彼らの側に立って奉仕している新参メンバーたちは講話に耳を傾けており(77節)、講話が終わると全員が講話者に拍手を送る(79節)。その後彼らは、食べ物を載せた食卓を部屋の中に運び込んでくる(81節)。これら一連の饗宴の流れにおいて新参メンバーが登場しているのは、この共同体における彼らの役割や仕事に焦点を当てて取り上げることが目的ではなく、あくまで彼らと古参メンバーたちとのつながりを示すことが意図されているにすぎないように思われる。フィロンにとっての関心事は、下働きの仕事に従事する

のは奴隷ではなく、共同体の中から選ばれた自由人であって、実の両親に対する子供たちのように、彼らが奉仕の勤めを愛しているということを示すことにあると考えられる。

三・二 テラペウタイの共同体運営

テラペウタイの実際面についてさらに検討すると、新参メンバーたちはこの共同体の維持において大きな役割を果たしていることが明らかになると思われる。

フィロンが『観想的な生活』において重点的に取り上げる古参メンバーたちは、肉体労働をまったく行わず、ひたすら観想と旧約聖書研究に専念している。しかしながら、彼らが何ものにも妨げられることなく、観想に没頭する生活を不自由なく送るためには、誰かが彼らを養っていく必要があるであろう。新参メンバーたちには、古参メンバーたちが下働きの仕事の負担から免れられるようにするため、諸事の手はずを整える義務があったのかもしれない。『観想的な生活』においてフィロンは、このグループ全体について余すところなく取り上げて書いているわけではない⁽²⁹⁾。フィロンは、『自由論』75-91でのエッセネ派に関する記述において、彼らは金銭を稼ぐために、農耕に従事し、「平和に奉仕しうる技術を追求」(76節)していると述べている。また『ヒュポテイカ』一一8-10においてもフィロンは、エッセネ派がさまざまな職業に従事し、報酬を手に入れていると述べている。したがって、エッセネ派が収入を得ているということを考慮すると、これらの仕事はエッセネ派共同体の外で行われているものであることが、暗に示されている。前述のように、彼らが得る報酬はすべて持ち込まれて共同資金へと置かれる。さらに彼らは共同の家々に住み、毎日の食事を共同でとり、個人の衣服は所有していない(『自由論』86、『ヒュポテイカ』一一10-12)⁽³⁰⁾。

テラペウタイの階層序列における最高位はおそらく、「長老」すなわち古参メンバーの中でも最古参のメンバーであったものと思われる。Kraemerは、テラペウタイの女性メンバーはおそらく、集会や饗宴の場で「長老」として講話を披露することはできなかったのではないかと推測した上で、このテキストは曖昧であると指摘している⁽³¹⁾。最古参の講和者を表すのに用

いられている語は確かに、それぞれ男性形の *prophylaktos* (『観想的な生活』31) と *prophylaktos* (79-80節) であり、フィロンはここで男性の講話者を念頭においてこれらの語を用いた可能性は高い。だが、この講話者が、テラペウタイにおいてつねに男性であったと想定する必要はないように思われる。というのも、この共同体における年功序列は入会順が原則であったことを考えると、この共同体に最も長く在籍している最古参のメンバーが女性であるという可能性もあったと考えられるからである。さらに同様に、教説に最も通じている人物が女性であった可能性も排除できないと思われる(31節)。

おわりに

以上、フィロンの『観想的な生活』での記述を検討してきた上で、そこから得られるテラペウタイの全体像は、この共同体は特に大きいというわけではなく、富裕で教養のある階層出身の人々から構成されていた、というものになるであろう。そのような人々は町の騒々しさから退いて、アレクサンドリアの南西方面に広がる、石灰岩の隆起の低く横たわる丘の上に位置する土地において、静かな環境の中で旧約聖書研究に没頭していた。この観想的な哲学者集団は、町の喧騒から程よく離れた、周辺に村落が存在する安全性の保証された地域に、自分たちの場所を定めたのである。

彼らの共同体は階層序列制であり、このうえなく禁欲的で観想的な生活を送る古参メンバーたちと、その生活はある程度実践的で、下働きの仕事を行い古参メンバーたちを支えていた新参メンバーたちとの間には、明確な区分があった。さらにこれらの二つの範疇内には、この共同体への入会順にもとづく厳格な階層序列制度が存在した。このことは、フィロンによって語られていない、何らかの入会手続きが存在したことを暗に意味しているものと思われる。この共同体への入会資格は、男女両方にひらかれていた。古参メンバーの序列は、どんな会員でも、この派における在籍歴と、教説への専門的知識という観点から定められていた。テラペウタイは自分たちの地元である町を離れて、財産をすべて家族や友人に譲渡し、マレイア湖畔の入植地へと向かうのであるが、観想に専念する生活を営む彼らを経済的に支える支援者たちが、何らかの形で近くに存在したものと考えられる。

略号

- LCL Loeb Classical Library
LSJ H. G. Liddell and R. Scott, Revised and Augmented
by Sir H. S. Jones, *A Greek-English Lexicon*, with a Revised
Supplement. (Oxford: Clarendon Press, 1996)

註

- (1) 本稿は、一橋大学大学院言語社会研究科に二〇〇五年度に提出された修士論文の一部を加筆修正したものである。
- (2) 一般に、「アレクサンドリアのフィロン」ないし「ユダヤ人フィロン」と称される。エジプトのアレクサンドリアにおいて生涯を送った人物であり、裕福なユダヤ人名門の出であったとされている。ギリシア思想をユダヤ教思想体系にとりいれつつ、旧約聖書を寓意的に解釈した人物であり、当時のアレクサンドリアにおける、ギリシア哲学に関する最高權威の一人として知られている。
- (3) F. Daumas et P. Miquel, *De Vita Contemplativa*. Introduction et Notes de F. Daumas. Traduction de P. Miquel. PAFM 28 (Paris: Éditions du Cerf, 1963), p. 30.
- (4) フィロン自身の中に、人生の早い時期から、観想に没頭する生活への憧れのようなものがあつたことを伺わせる記述が、他の著作において見られることは事実である。たとえば『律

- LXX Septuaginta (七十人訳聖書)
PAPM *Les Œuvres de Philon d'Alexandrie*, 36 vols, eds., R. Armandez, C. Mondésert et J. Pouilloux. (Paris: Éditions du Cerf, 1961-92)

- (5) 本稿における『観想的的生活』の日本語訳は、すべて土岐健治訳（土岐健治訳 フィロン『観想的的生活・自由論——アレクサンドリアのフィロン』ユダヤ古典叢書、教文館、二〇〇四年）からの引用である。
- 法書の寓意的解釈」二85では、「私はたびたび親族の者たちや友人たち、そして祖国を後にして、荒野の中に入っていたが、それは観想に値する事柄の何か一つに専心するためであった」とあり、また『十戒各論』三1では、「かつて哲学や、世界とそこにあるものの観想に専念し、美しく愛すべき、この上ない至福の知性 (σοφία) を享受して、つねに神的なロゴスや教説 (δόγμα) とともにあつた時があつた」とし、続く同4節では「自分の運命に喘ぎながら、なおも屈せず、幼い頃から魂の中に吹き込まれた教養への願いを今も抱いており、この教養こそ、つねに私に同情を寄せ、私を高みに引き上げてくれる」と述べられている。

- (6) D. Winston, *Philo of Alexandria: The Contemplative Life, The Giants and Selections. Classics of Western Spirituality.* (New York and Toronto: Paulist Press, 1981) p. 41.
- (7) フィロン自身『巨人族』10において、清浄な空気のもたらす恩恵をたいへんに意識している。
- (8) J. E. Taylor and P. R. Davies, "The So-Called Therapeutae of *De Vita Contemplativa*: Identity and Character," *Harvard Theological Review* 91. 1 (1998) p. 12.
- (9) バトリマイオス『地理誌』四・五・二四参照。
- (10) Daumas et Miquel, *De Vita Contemplativa*, pp. 44-45. Daumas はまた、この地域に無数の井戸が存在すること指摘しており、このことは古代に入植地があったことを示している。Conybeare は、その位置づけを北東にするか南西にするかの賛否について考察しており、湖がエル・メクス下方の水路（あるいは複数の水路）を通して海へと流れ出ていたのは南西側であり、これは『観想的な生活』23で「近くの」として描かれていることを考慮すると、最終的に後者の可能性が高いと判断している。
- (11) 野町啓『謎の古代都市アレクサンドリア』講談社現代新書一四九三（講談社、二〇〇〇年）、七〇頁参照。
- (12) ストラボン『地理誌』一七・一・一五。
- (13) Cf. Daumas et Miquel, *De Vita Contemplativa*, p. 45.
- (14) 富裕な人々の保養地については、*ibid.*, p. 42 参照。
- (15) LSJ p. 1017.
- (16) *Ibid.*, p. 611; J. Lust, E. Eynikel and K. Hauspie, *A Greek-English Lexicon of the Septuagint*. 2 Vols. (Stuttgart: Deutsche Bibel Gesellschaft, 1992, 1996), Part 1, p. 166. なおこの語は、XXII記二五31では「壁で囲まれている小村」の意で用いられている。
- (17) F. C. Conybeare, *Philo about the Contemplative Life* (Oxford: Clarendon Press, 1895) p. 294. Conybeare 曰く、*ἡ ἀναβιβαστικὴ τῆς ἐν τῷ νότῳ τοῦ νότου τοῦ νότου τοῦ νότου* の意で用いられている。
- (18) Cf. Taylor and Davies, "The So-Called Therapeutae of *De Vita Contemplativa*: Identity and Character," p. 13.
- (19) LSJ p. 947.
- (20) *ἡ ἀναβιβαστικὴ* は、フィロンの著作では、この『観想的な生活』20と『アブラハム』23の二箇所においてのみ用いられている。
- (21) Conybeare は「テラベウタイは孤独を追求していたとしても、決して砂漠にひきこもったわけではなかった」と指摘している。Conybeare, *Philo about the Contemplative Life*, p. 210.
- (22) ヘスリングその他の競技のための、古代ギリシアにおける公共の学校。
- (23) R. S. Kraemer, "Monastic Jewish Women in Greco-Roman Egypt: Philo Judaeus on the Therapeutrides," *Signs: Journal of women in culture and society* 14 (1989), p. 350.
- (24) *Ibid.*
- (25) *Ibid.*, p. 366.
- (26) Kraemer は「テラベウタイは安息日に一堂に会する際に質素

な食事をとると述べている。Cf. Ibid. p. 345.

- (27) なお Colson は、18 節では「食卓」(*trapeza*) を複数 (tables) で訳しているが (F. H. Colson, *Philo* 9. LCL; Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1941, p. 163) 19 節では単数で訳出するべきであると思われる。Conybeare (1895) ʹ Geoltrain (1960) ʹ Daumas et Miquel (1963) ʹ Winston (1981) ʹ Corrington (1990) ʹ Leloup (1993) ʹ は皆単数で訳出する。横臥する者たちには、部屋に運び込まれたその食卓から、食事が供されたものと思われる。

- (28) ここでの *diakoniai* という語は、男性あるいは女性両方を指す可能性がある。たとえば、ローマの信徒への手紙一六一では、コリント郊外にあるケンクレアイの教会におけるフォイネーは、ʹ *diakoniai* であると考えられる。

- (29) D. Hay は、本書は実在する禁欲的集団を描いた著作であるとしながらも、そこではフィロンによって理想化されている側面が少なからず存在することを指摘しており、その上で Hay は、フィロンにとってテラペウタイは親想という徳の模範例となっていることから、彼は護教的な意図でもって本書を執筆したとし、おそらくは終末論的思想のような、フィロンの

目的にそぐわない、あるいは不都合な側面は、意図的に言及されていないのではないかと指摘している。D. Hay, "Things Philo Said and Did not Say about Therapeutae," *Society of Biblical Literature Seminar Papers* 31 (1992), pp. 673-683.

- (30) エパフスも同様に、彼らが財産を共有し農耕に従事していることを強調している (『エパフス古代誌』一八 18 - 22 ʹ 『エパフス戦記』二 119 - 161)。

- (31) 「女性」は、全体講話の演説のような、共同生活への何らかの参加から除外されていたのかもしれない。このことは、彼女たちは独唱しなかったことを示唆しているのかもしれない (Kraemer, "Monastic Jewish Women in Greco-Roman Egypt: Philo Judaeus on the Therapeutides," pp. 344, 346 n. 16)。⁹ しかし、フィロンは「各人」(*ēkastos*) が賛歌を歌うと述べていることから (『親想的生活』81) ʹ、彼女たちが何らかの役割から除外されていたと想定する理由もないように思われる。Cf. D. Sij, *Philo's Perception of Women*. Brown Judaic Studies 209 (Atlanta: Scholars Press, 1990), pp. 209-211.

(きむら かずよし／博士後期課程)